

波

「昭和の恐慌」などは見事なもので、それを受け入れざるを得ない。これを受け入れたい。歴史が事実のたがらない人びとは、おおかたI.F.ストーン「秘密朝鮮戦争」の「米韓軍の侵入」といふ仮説に頼って、「アメリカが当然のだが」とかく味方を真切にまいといふ配慮を転化していただのである。と

のちから北の侵入、説が事実を合致するといふ見解が出た。これはいいことだ。神田文人は味方を真切にたが、事実が即する。味方を真切にまいといふ配慮を転化していただのである。と

(東西南北)

論壇時評

中嶋 嶺 雄

米欧はもとより、アジア諸国から、国際社会における日本の現状打破的な役割の再検討が迫られているとき、当の日本は、政治的に保守体制のもとで長く現状を維持している。むしろ、そのように国内的に安定しているがゆえに、国際的には、現状打破的な役割を果たせるのかもたない。

「これからの日本」について多元討論だが、これまではともかく、これからの日本はどうなるのか。この課題を正面からとりあげているのが、「エコノミスト」創刊六〇周年記念の臨時増刊「二〇八行へ」これからの日本」である。

この臨時増刊のメインは、伊東光晴の総合司会による多元討論で、西村肇・松下寛「科学と技術の進歩を問う」、中西哲郎「西部邁「日本の大衆社会を超えて」、佐藤経明・青木昌彦「二つの経済体制に共通するジレンマ」という三つの座談から成っている。いずれも、気鋭の

興味深い斬新な発想

▲「エコノミスト」臨時増刊号での西部邁発言 佐藤誠三郎「岐路にたつ自民党政権」▼

変化する政治状況への自覚問う



佐藤 多持 画

文化

「日本の大衆社会」にかんする西部の発言であった。西部は、「十九世紀的な意味

の過程に参加していく」大衆から成る「高度大衆社会」が今日の日本の姿だといふ。

西部はさらに、「むしろ田中元総理が代表者として総理職の地位を握り、大衆の好

論客を迎えて、重要な課題を論じているのだが、私にとってもっとも興味深かったのは、三〇年代のエリート主導の「大衆」批判の発想も、もはや有効ではないとの前提で、様々な単位や集団で「積極的に意思決定

での大衆概念」つまりヨーロッパ市民社会論的な発想も、一九三〇年代のエリート主導の「大衆」批判の発想も、もはや有効ではないとの前提で、様々な単位や集団で「積極的に意思決定

刊誌や雑誌から、「ヨットに乗っている」との写真を撮らせてほしい」と注文がくる。十年近く前から、クルーザーに乗り代えていたのだが、それすらも「二〇三〇年、放置したままになって、多忙が一番先に駆逐するのは趣味の部分である。

日本ペンクラブの常務を引き受けてから数年になるが、特に去年から忙しくなった。来年五月には国際ペンクラブの大会を東京で開催。その準備で大変になっている。川淵康成会長の際に開催してから二十七年目になるわけで、五十二万八千三百七十九名の期待がかかっている。

ロンドンの本部からは、しばしば催催を要望されていたのだが、四、五年前まで赤字財政であり、会員の急激な減少が心配だったので、返事を濁していたのだ。会員も近年増えつつある(ようやく)財政も黒字になって来て機運が盛り上がり、井上廣会長、巖谷大四郎、専務のもとに来年の第二回東

を問うている。佐藤の「構造的变化」とは、従来の保守の対立軸のみならず、日本社会の変貌を背景にした新しい政治的組織化の進展と支持者層の流動化であり、こうした状況のなかでの「保守」の状況は無党派派は打ち破れるか(朝日ジャーナル・六月三日)が「若者文化」や「無党派派」の政治意識や関心を分析建たなくして、現代人は真に快活な表情を回復することはできない。肉体が基礎的なものではなく、平和な時代とは別名、退屈な時代でもある。その平和な時代で選挙とはある意味で緊張感をもって勝負を味わなければならない面白いゲーム。世代と三〇年代」の静かな語り

無党派層の政治意識や関心を分析

日本政治論では、若手政治学者の首魁教養「退屈な政治」を待望し、いわゆる全共闘世代に発言させているけれども、この特筆のなかでは、「思想の再建」が「若者文化」や「無党派派」の政治意識や関心を分析建たなくして、現代人は真に快活な表情を回復することはできない。肉体が基礎的なものではなく、平和な時代とは別名、退屈な時代でもある。その平和な時代で選挙とはある意味で緊張感をもって勝負を味わなければならない面白いゲーム。世代と三〇年代」の静かな語り

早乙女 貢

Literature in the nuclear age—Why do we write? を訳すと「核の問題よりも、飢えと貧困の方が重大な」という情報も翻訳し方としても、直訳・意訳の問題もある。英語圏の会員に耳馴染ないことがかえって効果がある場合もあるし、作家とペンクラブ活動で、核の問題の多寡と、つと点も考慮されるのではないかと、意見も飛びだしたりした。

叩き台を提出へ

来る九月には今年度の大会がベネチアのラカステで開

衝撃と理解

国際ペン東京大会のテーマ訳文(二)

Literature in a world of nuclear tension

Literature in the age of nuclear confrontation

Literature and the nuclear syndrome

Literature in a nuclear world

オーソトリアの画家 ノーラン氏が個展

オーソトリアの代表的画家 シドニー・ノーラン氏の個展が東京・銀座の東京セントラル美術館で開かれている。(七月三日)